

## 資料室だより 76

ネウマといわれる記譜法は、ある地域のなかではほぼ同一の方法が浸透するものだが、上部イタリアでは様々な記譜法があった。そのなかでもノナントラは極めて独自である。

当資料室にはノナントラの楽譜史料が2点あるが、あまり利用されることもないのでここに紹介する。

#Early Medieval chants from Nonantola(Recent Researches in the Music of the Middle Ages and Early Renaissance, 31), A-R Editions. Ed by James Borders

#Troparium Sequentiarium Nonantulanum(Monumenta lyrica Medii Aevi Italica,1)  
Academia Scientiarum Litterarum Artium

モデナの北東14キロにあるノナントラは751(752)年にランゴバルト王アイストゥルフが創設したベネディクト会修道院がある。これは中世イタリアにおいて、モンテ・カッシーノに次いで重要な修道院である。初代の院長ノナントラの聖アンセルムはここに重要な文書館を形成した。これらのうち現在まで残っている音楽史料はボローニャの *Biblioteca Universitaria*2824, ローマの *Biblioteca Casanatense* 1741, *Biblioteca anazionale Centrale* 1343 で見ることができる。上記の *Troparium* はローマ、カサナテンセ図書館所蔵の写本ファクシミリである。そして *Recent Researches* に所収されている現代譜は詳細なクリティカル・コメンタリーにページが割かれ、単旋律聖歌のすぐれた批判版である。これらは非常に豊富なトロップスやセクエンツィアを含み、また譜線ありネウマであることから、初期のグレゴリオ聖歌レパートリーの旋律復元にも有用である。また、*confractoria* といわれるパンを裂くときに歌うアンティフォナ（ローマ典礼にはないもので、アンブロジーノ典礼からきている）、福音朗読の前に福音書を朗読台のところに運ぶ間に歌われる行列聖歌（これもローマ典礼にはない）などから成る。

驚くべきは記譜法の個性である。一時ヴェローナでも使用されたらしいが、どのネウマにもない特徴が備わっている。すなわち、シュテープラインの言葉を借りれば「ネウマがテキストの母音から花のように芽吹いている」。<sup>1</sup>

歌の楽譜というのはテキストの上に音符が書かれるものであるが、テキストの文字が譜線突き抜けて音高を示している。「音の担い手である母音と音の位置との結びつきは現代に至るまでの記譜法史上、かつて追求されてきたもののなかで最も密接であった」

次ページのファクシミリを参照してほしい。

杉本ゆり記

---

<sup>1</sup> Staeblein, B. ; *Schriftbild der Einstimmigen Musik* 単音楽の記譜法 音友社

de p[ro]p[ri]a sede nobis ferendo opem aditum,  
atq[ue] leuamen indulgentie Turros gabri  
hel hostes, p[ro]sternit turaphahel egris, affor  
medelam morbos absterge noxas miruc  
nosq[ue] fac inter esse gaudis G[lor]iatorum  
Nobile apostoll[ic]i Trop in nat aplor  
Simonis. 7 iude  
Admirans decus or d[omi]ni Almi dauidicus  
psalter pro clamat tall d[omi]ni. Michi